令和４年５月31日

浜田市議会議長様

団体　子どもの健康と人権を守る会
住所　浜田市周布町ロ８－４
代表者　　小竹和憲　㊞

幼児のマスク着用に関する陳情について

願意

① マスク着用が前提の差別や偏見を助長させる表記の貼り紙撤廃
② 市内保育所(園)・認定こども園に通う園児へのマスク着用を一律廃止
③ 保育士へのマスク着用の推奨・指導を中止し、本来の保育施設の在るべき姿へ早急に戻す
④ 人権とマスクに関する小冊子「たいせつなあなたへ」を子育て世帯及び保育施設等子どもと関わる機関への配布
⑤ 手洗い可能な場での消毒用アルコールの撤廃
⑥ 地域の実情に応じた独自対策の推進

理由

① 政府は、新型コロナ対策の基本的対処方針を変更し、マスクについて着用の必要がない場面等を示しました。しかし、この２年半の間、政府やメディアは感染者数増を連日報道し国民の不安を煽り続け、それを受けて県や市は「感染対策の徹底」を求め、100%に近い国民がお願いに従ってマスクを着用する生活となりました。元々、風邪の際にマスクをする習慣のあった日本でマスク着用は屋内外問わず一度も義務化となってはおらず、エアロゾルに対して予防効果はないとされていますが、ほとんどの人は事実を知らないままです。
町ではマスク着用が前提の「思いやりマスク」「マスクマナー」「大切な人を守るマスク」といった同調圧力を生み、差別や偏見を助長させるかのような表記の貼り紙をし、マスクをしない＝ルールを守れない、悪とする風刺も生まれました。見た目には分からない健康上の理由からマスクを着けられない人もいます。思いやりとは

浜田市議会 受 4.5.31 付 第119号

マスクをする人もしない人もお互いの気持ちを尊重するもので、一方の行為だけが善意であるかのように促すものではありません。厚労省の基本的な感染対策はマスクマナーではなく咳エチケットです。

新型コロナウイルスも3年目に突入し、学術的見識も広まり未知のウイルスではなく対応可能なウイルスとなりつつあっても、行政の対応は依然として変わる事無く、何をするにも新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ事が優先だと言われ続けています。結果として熱中症リスクを考えて適宜マスクを着脱するようにと言われても、1人で散歩をしている高齢者は相変わらずマスクを着用し、どんなに暑い日の屋外でもマスクをして子どもと遊ぶ親子の姿があります。マスク生活の習慣化により、熱中症で死に至るリスクよりも、人目を気にして大人でさえ自分の意志でマスクを外せなくなっているのです。この国で流行っているのはコロナよりもマスクだと思います。まずは公共の場において差別や偏見を招きかねない表現の中止を求めます。マスクが必要な人、マスクを着ける事が出来ない人、どちらも浜田市にとって大切な人です。

② そうした中、子どもを取り巻く環境は決して子どもの成長に好ましい傾向にあるとは言い難く、問題はもっと深刻です。マスク着用によるリスクが取り上げられる事は無く、大人を守る為に子どもの犠牲は仕方ないとされ、町の宝、未来の希望である子どもの心身への悪影響を真摯に受け止める大人が減ってしまいました。
乳幼児は自ら息苦しさや体調不良を訴える事が難しく、自分でマスクを外す事も困難です。口元を覆われている違和感から注意力も散漫となり正しく着用する事が難しい為、感染の広がりを予防する効果はあまり期待出来ません。マスク着用により、呼吸や心臓への負担、熱がこもる事による熱中症や鼻血、窒息、骨格のゆがみ、口呼吸、酸欠や顔色等の体調変異時に発見が遅れる等の注意喚起もされています。

未就学児へのマスクを一律には求めないと示されても尚、慎重な保育施設では感染者を出さないようにと子どもへの着用を強いるルールが適用されています。子どもの呼吸は浅く早いのでマスクをして数分後には登山をしているのと同じ状態になります。苦しくて鼻を出していても、保育士によって鼻までマスクを上げ直され、中には午睡時にもマスクをさせていた園もあり、保護者からは戸惑いや心配の声も出ています。睡眠時の危険を十分に知り得ているはずの保育のプロでさえ、感染対策に傾倒するあまり本来あるべき保育の姿を忘れ、不適切な対応が横行しています。虐待の指標で「鼻と口を塞ぐなど窒息につながる行為」「熱中症を招くような環境下での放置」とありますが、感染対策であれば虐待にはならないのでしょうか。園だけに問題があるのではなく、それを取り巻く社会、行政の対応、疑問に感じても見

て見ぬ振りをして声を挙げない大人が招いた現象であると言えます。
厚労省から幼児は如何なる年齢であっても保育者の注意が必要であり、子どもや保護者の意向に反して着用させることは推奨しない、子どもが拒否した場合は着用させるべきではないとしていても、過剰な感染対策による危険の周知やそれを抑制する働きかけが展開されない限り、大人の安心と引き換えに子どもの健やかな発育だけではなく生命さえも脅かされています。上記で記述した内容は浜田市内の実態であり、万が一の事故が起こってしまう前に早急な対応が必要です。

③ 乳幼児期の成長段階は人格形成上とても重要な時期であり、親や保育者が与える影響は大です。親や保育者から多くの刺激を受けながら、愛着の絆を形成していきますが、安心感が刻まれないと海馬に不安や恐怖が記憶されていきます。
「脳の発達には臨界期があり、それは生後 3 年である。それは脳が生後発達途中であり、この 3 年のうちに正常で健康な学習体験をさせることが重要である。」と 1997 年にアメリカのホワイトハウスは結論付けています。目で会話をするという事が不可能な乳幼児は、他者とのコミュニケーションの土台を顔全体の表情を見て、模倣することで学習していきますが、保育士の口元は不織布マスクで覆われている為に認知的スキルを獲得出来ません。この発達の機会を取り逃がしてしまえば、目だけで表情を想像したり感情を読み取ることは出来ず、円滑な人間関係を構築することが難しくなります。

マスク生活になってから表情筋が衰えた事により、滑舌が悪くなったと感じている保育士もいます。正しく発音する事は子どもの耳にとって大切であり、発語の遅れや IQ 低下の報告もあります。子どもの発達を懸念してマスクを外したくても、指摘の声を恐れて園独断では外せないと感じています。これ以上、保育士に不織布マスクを着用して乳幼児と接する事は、人を育てる事の放棄にも繋がるので保育士のマスク着用の廃止と、児童福祉法第 39 条の規定に基づき、保育に欠ける子どもの保育を行い、健全な心身の発達を図る事を目的とした児童福祉施設で入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進する事に最も相応しい生活の場であるよう早急に本来の保育の在るべき姿に戻すよう強く求めます。

感染を予防する対策として不織布マスクの着用が推奨されていますが、着用効果ばかりが報じられ着用によるリスクがほとんど認知されていません。大人より酸素を多く必要とする子どもはマスク着用から数分で低酸素状態を作り出し、今の季節は熱中症で生命に繋がる危険があります。身長の低い子どもは地面に近いので、大人よりも 3℃以上の熱を受けることがあります。子どもは体温調節が未熟な上に、適切に判断して水分摂取したり、早めに休憩したりが出来ません。そこへ更にマスク

をしていればマスクによって狭い視界は更に遮られ、注意散漫にもなります。呼気によりマスクの表面は濡れていますが体内では脱水状態となっている為に、自己治癒力は働かず自覚症状が現れる前に突然倒れてしまいます。マスク生活となってから鼻血を出す子どもも増え、長時間の着用は免疫力の低下や通常生活の中で獲得するはずだった免疫も得られなくなり、子どもを守る為の予防対策として期待される効果と引き換えに、子どもの健康が損なわれるのは本末転倒です。表情が見えないことによるコミュニケーションや知育の発達遅れなど心身ともに悪影響を与えることは、世界中のたくさんの医師・専門家が提言しています。他にも口呼吸や心臓への負担、窒息、眠気、怠さ、骨格のゆがみ、顔色等の体調変異時に発見が遅れる等の注意喚起も多数されていますが、周知には至りません。
保育施設からマスク着用を言われるだけでなく、乳幼児へのマスク着用のリスクを認知されていない保護者の不安からマスクを着用させているケースもあります。その事から子育て世帯、保育施設等の乳幼児と関わる機関へ子どものマスク着用によるリスクの周知・理解は必要であり、各家庭での判断を促す一助として市民団体リトルレボリューションが発行している小冊子「たいせつなあなたへ」を未就学児(在宅児含む)の子育て世帯、保育施設等への配布を求めます。

④ 県内では消毒用アルコールを隠れて舐めて意識不明になった子どももいます。消毒用アルコールは手洗いを出来ない場合の対策であるはずが、感染対策の徹底という指示の元に過剰な対策が取られ、自分の意思を示せない子どもの生命が脅かされています。店内に設置してあるフットレバー式の消毒を遊び半分で使用し、目や口に噴射する光景もよく見られます。また、除菌し過ぎる環境で通常生活の中で獲得すべき免疫を得られず、長期化しているマスク生活で免疫力が低下したところへ小児における感染症に罹患すると通常より重症化し易い事も報告されています。子どもの健康を考え、手洗い可能な場での消毒用アルコール撤廃、やむを得ず使用する場合は子どもの口に入っても安全な成分であるものとし、大人の監視下において目や吸引に細心の注意を払っての使用を求めます。

⑤ 浜田市では65歳以上の94%が重症化を防ぐと言われているワクチン接種を終えています。重症化をした子どももいません。陽性者数も市民比率の小数点以下です。
命を脅かす恐れのある感染症はコロナだけではなく、過剰な対策によって子どもの成長発達や健康への弊害が顕著に生じている今、地域の実情に応じた対策が取られても良いのではないでしょうか。
今年度から子どもの医療助成も拡大され子育て世帯の安心は増えましたが、大切なのは病院へ掛かることではなく、体調を崩してもすぐに回復できるような心身とともに健康な子どもを社会全体で育てることが前提であると考えます。病院や介護施

設等の必要な場面に応じての感染予防、対策は大切だと思いますが、大人の都合で子ども達の健やかな成長を理不尽に奪うのは、本来の目的とは間違った方向に進んでいると感じます。海外では基本的な感染対策を取り止め、ノーマスクの動きが広がっています。日本は、島根は、浜田市はいつまで世界と逆行する政策を続け取り残されていくのでしょうか。未来に希望が持てない子どもは自身の存在意義、居場所を求めて都会へ出て行きます。人口流出は益々悪化するでしょう。予防線を張って子どもから何もかも取り上げてしまうのではなく、何か問題が起きても子どもは何も心配しなくていいと安心を与えられる大人が増え、いずれ子ども達が大人になった時は地元に恩返しをしたいと思えるような寛容な町でありますように。私達が育てているのは子どもではなく、未来そのものです。最初に声を挙げるのはとても勇気のいる事ですが、子どもの犠牲の上に成り立つ社会ではなく、大人が子どもを守り誇れる町となるよう心から望んでおります。